

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

中山英之 建築家

Hideyuki Nakayama / Architect



CREATOR^{No} INTERVIEW 106

中山英之 Hideyuki Nakayama

1972年福岡県生まれ。1998年東京藝術大学建築学科卒業。2000年同大学院修士課程修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、2007年に中山英之建築設計事務所を設立。2014年より東京藝術大学准教授。主な作品に「2004」、「O 邸」、「Yビル」、「Y邸」、「石の島の石」、「弦と弧」、「mitosaya薬草園蒸留所」、「Printmaking Studio/ Frans Masereel Centrum」(LISTと協働)。

主な受賞にSD Review 2004 鹿島賞(2004年)、第23回吉岡賞(2007年)、Red Dot Design Award(2014年)、第17回環境・設備デザイン賞優秀賞(2019年)、日本建築仕上学会 学会賞 作品賞・住宅部門(2019年)。主な著書に『中山英之/スケッチング』(新宿書房)、『中山英之 | 1/1000000000』(LIXIL出版)『建築のそれからにまつわる5本の映画 , and then: 5 films of 5 architectures』(TOTO出版)。



クリエイターインタビュー

『ジャンルが混ざり合う線引きのない街に』

違う目線を持つことで当たり前だった地図が変わる。

update_2019.7.3 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

地上からほんの少し浮いている木箱のような家や、道路を挟んで地下でつながっている2軒の家。中山英之さんの建築は、こちらの想像を軽々と超えて、空間に思わぬ表情を生み出します。TOTO ギャラリー・間で開催している「中山英之展 , and then」もまたしかり。展覧会の組み立て方や、建築やアートなどとの向き合い方、そして街の捉え方などから、中山さんのてがけるものが人を魅了する理由を探ります。

建築家も見ることのできない、建築のそれから。

一般的な建築展というのは、建築を構想する過程で生まれた建築家の思想や哲学が開示される場所であることが、ほとんどだと思います。けれどもそれでは、たとえば自分の親戚や古くからの友達みたいな、普段から建築に興味を持っているわけではない人の目には、よくわからないものだったりする。建築に不案内な人にも伝わるような展覧会って、どういうものなのか。そう考えたとき、建物ができる前の思想や哲学ではなく、建ってからの建築家の知らない時間を見てもらう方が、もしかしたら伝わるものになるのではないかと。それが、「中山英之展 , and then」(＝それから)という展覧会を考えた最初のきっかけです。

今は誰の手にもカメラがあって、自分で自分を撮ったからって、それをナルシストと指差す人はもういませんよね。それなら建築の展覧会でも、施主が自ら置いたカメラの前で暮らしている様子をそのまま展示することだって、自然なのではないか。もちろん写真でも良かったのですが、風で何かが揺れていたり、人が寝たり食べたりしている方が、より嘘がない。それで、映像にしようとなりました。

5つの建物を5本の短編映画にしているのですが、僕自身は映像制作にほとんど関わっておらず、実際に建物を使われている方や、過去にその建物の設計に関わっていた元所員などに撮影や監督をお願いしています。ひとつだけ、僕からはじめに「砂糖少なめでお願いします」ということを、みなさんにお話ししました。起承転結のあるエモーショナルな物語である必要はなくて、そこにあるものが単に映っているだけでいいんです、と。それ以降は、撮影が始まって質問や意見を求められたときも、「どちらでもいいです」と答えたりして、極力関わりをもたないようにしました。ある冒険写真家の「観測者は観測結果を変えてしまう存在でもある」という言葉が心に残ってしまっていて。自分が関わってしまうことで、ありのままであったはずのものが変化してしまうのが怖かったのだと思います。



「中山英之展 , and then」

建築は完成後、どのように使われ、どんな日常が繰り広げられるのか。「建築のそれから」に着目した、建築展のイメージが変わる独創的な個展。ギャラリー全体がミニシアターとなり、5人の監督が撮り下ろした短編映画5作品と1作品を追加し計6作品を上映。ロビーに見立てた展示室には、映画の製作過程や、登場する建築のドローイング、模型なども。中山さんによる手書きの解説も興味深い。TOTO ギャラリー・間で2019年5月23日(木)～8月4日(日)開催。

撮影：©Nacasa&Partners

ほったらかしの中に息づく力強い生。

それぞれの監督からあがってきた映像を、他人事のように観客になった気分で、何が始まるのかわくわくしながら見たのですが、初めは、いや、これはまずいことになったぞって(笑)。子どもの数が増えて空間が追いついておらず、竣工写真の風景とはほど遠い、生々しい今の様子が隠すことなく映っていたりしたものだから。建築家の貧弱な想像力がそのまま露わになっていて、最初にラッシュを見せてもらったときは、ちょっと不安になりました。でも、観ているうちにそんな建築家の心配事なんて、なんだかどうでもよくなってしまった。自分が建築家であることを忘れて、映画を観るひとりになってみると、そこには力強い生がちゃんと映っていた。生きるっていいことだな、なんてことまでうっかり思ってしまう。

たとえば子どもって、ある意味、とても残酷な生き物ですよ。大人の考えた設計意図なんて、徹底的に関係ない。そういう自由さが、本来僕は大好きなはずなんです。だけど、いざ計画する側に立つと、いつのまにかそういうことを忘れて、ついつい全部をコントロールしなきゃと思ってしまう。ただ、自分も観客席に座っているうちに、そうなりかけていた建築家があっさり裏切られていることがだんだん愉快に思えるようになってきました。本当は建築とか計画とか、そういうこととは別のところにある、もっと長くて大きな時間の流れのようなものをつくってみたいと思っていたはずだったのだから、この展示のやり方できっとよかったのだと今は思っています。

ギャラリーを映画館にした理由。

展覧会の映像コーナーって、実を言うと苦手なんです。大抵途中から見ることになるし、全部見なきゃっていう義務感に駆られてしまうから。自分の好きな時間に行って、気になる作品の前で好きなだけ時間を過ごせるのが、美術館やギャラリーのもっともいいところ。映像展示がメインになることで、その良さが失われるのは避けたいなと最初は思いました。だけど、僕みたいなことを感じている人たちが映像嫌いかという、映画館に行くのは大好きだったりする。だったら初めから、このギャラリーを映画館ということにすればいいじゃないか、と。それで「TOTO ギャラリー・間（通称 " ギャラ間 "）」を「CINE 間（シネマ）」に読み変えるっていう駄洒落が浮かんだ（笑）。くだらないことを思いつくと肩の力も抜けるし、名前ひとつで同じことも別の意味になる。言葉って面白いですね。

映画館は映画を観るための場所だけど、わざわざ行きたくなるのは映画館そのもののムードが好き、というのも大きいです。ロビーに過去上映されていた映画のポスターが貼られていたり、上映中の作品のプロップや衣装が展示してあったりするだけで心が躍る。誰かを誘う口実にできたりするのもいいし、そういう全部をひっくるめて、映画館に行くという体験です。

「映像展示のあるギャラリー」ではなく、「映画館」である。そう考えてみたら、展示のために新しい模型や図面を用意するのはやめにしようということに、自然と落ち着きました。映画が完成したあとに、さらに内容にまつわるものをつくって、ロビーに展示するのは単純におかしいから。中にはお見せするには恥ずかしいものもあったけれども、事務所中をひっくり返して、建物が完成するまでの時間につくられたものだけでロビーを構成することになりました。



TOTO ギャラリー・間

TOTO が運営する、建築とデザイン専門のギャラリー。1985 年 10 月の開設以来、国内外の建築家やデザイナーの展覧会に特化。展示デザインを出展者に委ねることで、展示空間そのものが「作品」になるユニークな展示方法をとっている。



中山英之 建築家

HIDEYUKI NAKAYAMA / Architect

update_2019.7.3 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

気持ち的には、ようやくレポートを出し終えたところ。

映画館とは言ったものの、ベルベットのふかふかのシートやカップホルダーが設置できるわけではありません。とはいえ、そこは建築家なのだから、単純にプロジェクターのスクリーンを見るだけの場にするわけにもいかない。それで唯一、映画づくりに介入したのが、特別なスクリーンを前提としたカメラを制作して監督に渡すことでした。『弦と弧』という映画に使われたカメラなのですが、僕の事務所の新人スタッフに天才エンジニアがひとりいまして、360度カメラが建物内の吹き抜けを上下する装置をゼロからつくったんです。その結果、3つのスクリーンに投影された全方向視野を同時に観る、ここにしかない映画館ができました。

映画を観終わったあと、パンフレットを買って帰るのも大事な楽しみのひとつ。『mitosaya 薬草園蒸留所』の撮影をしてくれた江口宏志さんは本のプロでもあるので、『建築のそれからにまつわる 5 本の映画 , and then: 5 films of 5 architectures』という作品集の編集にも加わっていただきました。映画のパンフレット5冊分をひとつに束ねたような本なのですが、映画のパンフレットって、シーンのグラビアや登場人物の紹介に始まって、時には音楽の解説やロケ地に関する情報、それから監督の小難しい話まで、いろんな話題が盛り込まれていますよね。この本も建築家の一般的な作品集とはちょっと違って、建物の写真は映画のステルとして入っているし、監督の絵コンテやサントラの楽譜と一緒に、設計当時のメモやスケッチ、映画を観た人が気になりそうな建築の細部の情報などが載っています。もちろん建築家の書いためんどうかい文章もありますが（笑）。映画パンフレットという形式を使うことで、建築雑誌や作品集ではなかなかない切り口になりましたし、制作中は、知りたい人はたくさんいるんじゃないかなと思うようなことが載せられて、いろんな人に興味を持ってもらえるものになっていたら成功だよねと話し合ってたんです。

展覧会は過去の仕事を振り返る機会にもなりますが、僕としてはまだまだ何もかもが始まったばかりのような感じで。今はようやくレポートを出し終えたような心境です。なので、自分の仕事を客観的に振り返るような本や展覧会をつくるには、まだまだ時間がかかりそうです。



『弦と弧』

2017年に竣工した「弦と弧」は、2階建てほどの大きさに、形のばらばらな10層の平面が重なった住居兼仕事場。モーター制御された360度カメラが吹き抜けを上下し、朝から晩まで一日の出来事が淡々と映し出される。

映像監督：八方椎太



『mitosaya 薬草園蒸留所』

2018年竣工。人が来なくなり閉園した薬草園を、果物とハーブを使った蒸留所に生まれ変わらせた。江口宏志さんがカメラを担当し、動き始めたばかりのお酒づくりの日々を記録している。

撮影：江口宏志



『建築のそれからにまつわる5本の映画 , and then: 5 films of 5 architectures』

映画パンフレットをイメージしてつくられた「中山英之展 , and then」の建築作品集。パンフレットなど映画グラフィックを多数手がけている、大島依提亜さんがデザインを担当。作品ごとにデザインや紙を変えることで、5冊のパンフレットを表現。会期後は本書に記されたURLにアクセスして、5本の映像を見ることができる。

建築以外のすばらしいものたちが、新しい世界へと連れていってくれる。

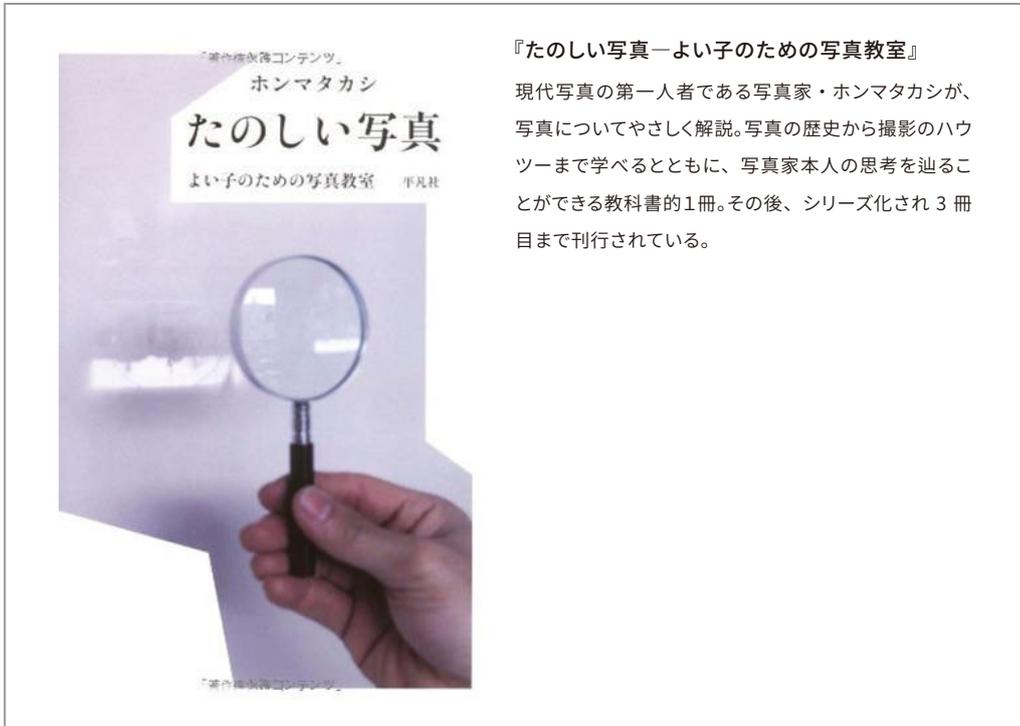
僕は高校時代、成績はでたらめ、取り立ててのめりこむようなものもない人間でして（笑）。今も大概ですが、まあそれでも、あるときふと入ってみたギャラリーで建築というものに出合ったことで、そこから自分にとっての世界がひとつ始まりました。建築そのものへの興味もそうですが、何より大きかったのは予備校や大学など行く先々で出会った人々から受ける影響です。彼らの話は、高校の教室では聞いたこともない固有名詞や知らない言葉であふれていて、すごく憧れました。それ以来、自分がまったく知らない映画のタイトルや、アーティストやミュージシャン、ファッションデザイナーの名前をこっそりメモしては、ひとりで映画館やギャラリーに通う毎日。新しい何かを見るとそれについて書かれた文章や批評も気になるようになって、世の中には小説や文学とは違う種類の言葉があることも知りました。

このとき出会った言葉たちは、僕にとってとても大切なものです。建築に興味を持ったことをきっかけに、映画監督や小説家やファッションデザイナーのような、ほかの分野の人々と直接お話をするような機会でも彼らとちゃんと話をするのできる言葉を持てた。別の分野の言葉を知ると、また建築について考えることが広がっていく。

「CINE 間」のロビーには、そうした過程で出会った自分にとって大切な言葉や本も、模型や図面の間に置かれています。たとえば、映画監督のフランソワ・トリュフォーがああアルフレッド・ヒッチコックにインタビューをした『定本 映画術 ヒッチコック・トリュフォー』。映画のプロフェッショナルが、同業者の、しかも神様のような存在である監督から創作の秘密を聞き出すなんて、これ以上の教科書はありません。建築の世界では、磯崎新さんが例外的にそういう存在ですが、建築家は基本的に自分の話を聞いてほしい人たちばかりだから、同業者に話を聞くなんでまずやらない（笑）。映画監督もそこは似ていると思うのですが、トリュフォーみたいな人が稀にいて、同業者への憧れを隠さずに、しかもそれを文章にしてくれた。



そんなふうに、それぞれのジャンルのプロたちが、その分野の深淵を分かりやすく解き明かすような本が僕は大好きです。最近ではホンマタカシさんの『たのしい写真』とか。そういう本に出会うことは、もしかしたら僕にとっては建築について解説された本よりもずっと、頭の中の考えを遠くまで運んでくれるし、またひとつ世界を新しく開かせてくれる。映画を観たりファッションにときめいたりしながら、そこから新鮮なものの考え方や世界の見方を知ることが、今となっては、僕にとって建築を考え続けるために欠かすことのできないものになっています。



何もないところに都市をつくる。

そんなことを言っておきながら、本音を言うと、ほかの建築家の仕事はできればあまり見たくないんです。だから建築を見に行くような旅をしたことがなくて、どこかの都市に行ったとしても建築を見ないで帰ってきてしまう。絶望するのが怖いんでしょうね。実はコルビュジエすらろくに見たことがありません。

そんな出不精なのですが、以前ラスベガスにひとりで行かなければいけないことがあって。砂漠の真ん中にあんな人工的な都市が存在して、しかもほかの都市とはルールがまったく違うのが面白かった。伝統や歴史なんて関係なく、月に都市をつくってしまうような感じですよ。世界中の都市が同じように見えてしまう時代に、一種異様なオリジナリティがある。けどそれらはある意味フェイクの寄せ集めだから、部品ひとつひとつはちっともオリジナルじゃない。その不思議さがなぜかずっと気になっていて。アメリカのイベントのバーニングマンとか、バンクシーのディズマランドなら行ってみたいと思うのも、もしかしたら同じなのかな。自分でもまだよくわからないのですが、何もないところから世界をひとつ考えてみるようなことに、なぜだか今興味があります。



中山英之 建築家

HIDEYUKI NAKAYAMA / Architect

update_2019.7.3 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

空間を読み替えると、都市の別の表情が見える。

東京藝術大学で准教授をしているのですが、音楽と美術の学部はあっても、美容やファッションを目指す人たちの学ぶ場所がない。僕は街で髪型やファッションを見るのも大好きなので、そういう人たちがどんな勉強をしているのか、すごく知りたいんです。だけど大学と専門学校というふうにはそれぞれはっきり分かれてしまっているので、互いにすごく興味を持っているはずなのに、一緒に何かを考えたりする場面がない。あるとしても、たとえばブティックや美容院を設計するみたいな形です。六本木という場所には、なんだかそういう壁を越えた混じり合いを予感をさせる何かがあるような気がします。

そのために空間としてできることがあるとするなら、それはもしかしたら建築の形はしていないかもしれませんが。たとえば原宿には昔、ホコ天がありましたよね。銀座は今もやっているけれど、ふだん圧倒的に空間を支配している車がただいなくなるだけで、ありとあらゆる出来事が勝手に起こる場が生まれる。そういうことって、建築家のデザインしたかっこいい特設ステージなんかよりずっと自由で魅力的です。六本木はいろんな種類の交通機関が高架から地下まで複雑に交差しながら集まっている場所ですが、そんな空間本来の一義的な意味を、一時ただ忘れて見つめなおしてみるような瞬間が生み出せたなら、形は今のままで、街まるごとを読み替えてしまうようなことができるかもしれない。そういう場所には、素敵な髪型やファッションがきつと似合うと思います。

ミツバチの視点から街を見つめてみる。

ファッションは「衣」、建築は「住」だからというわけではないけれど、mitosaya 薬草園蒸留所の仕事を通じて、最近「食」にも興味を持つようになりました。とはいえお酒って、生きていくうえで絶対に必要なものではないし、「食」と言ってもそんなに切実な話ではなくて。あとその場所でミツバチを飼い養蜂を始めたのですよね。これまで植物やペットに関心がなかったのですが、今、僕もミツバチを飼ってみたい。ミツバチは3キロも飛べるらしいんですけど、たとえば六本木で飼ったとしたら、新宿御苑や明治神宮あたりまで飛んで行けるわけです。街を歩きながらハチの行動範囲を想像してみると、自分の中の地図が変わってきますよね。

一義的な意味がなくなると、都市が変わるという話をしましたが、ハチは僕らと違う感覚でこの環境を捉えていて、彼らが組み立てる世界は僕らの世界とはまったく異なります。自分が持っていない目線になってみると、違う世界が現れる。そういった意味での食や第一次産業に、この頃興味を持つようになりました。



mitosaya 薬草園蒸留所

2015 年末に閉園した千葉県大多喜町にある薬草園の跡地を引き継ぎ、ボタニカル・ブランデーの蒸留所を立ち上げるプロジェクトが 2017 年よりスタート。蒸留酒の原料となるハーブなどの植物を育てるとともに、園内に生態系をつくるべく、2018 年より養蜂も手がける。中山さんは、蒸留施設などの設計を担当。

取材を終えて

建築は難しい。漠然とそんなイメージがあっても、中山さんの個展を見て、さらにはお話をうかがうと、建築とほんの少し仲良くなれたような気になってしまいます。ヒッチコックの映画のように、なんとなく見た人から通まで楽しめるいろんなしかけがそこにはあるのでしょうか。取材のときに着ていた牛がプリントされた T シャツも、人を楽しませたいというちょっとしたしかけ。最後にお話ししてくれた、第一次産業にちなんでのチョイスだったようです。「居心地の良いインパクト」は、中山さんのつくるものにも人柄にも表れていました。

(text_ikuko hyodo)